



北海道自然保護協会は昭和三十九年十二月一日の発足以来、非常に活発な活動をしてきた。北海道内の国立・国定・道立公園に関して、種々知事からの協議に答え、また厚生省、国立公園協会、日本自然保護協会などに意見の開陳もしてきた。

もっとも大きな問題としては豊平峡ダムの建設に関する意見の具申（これは開発局の積極的な協力によって工事に新しくトンネルがほられ、溪谷美の破壊が最小限にとどめられた）大雪山の赤岳・白雲・裾合平を経てユウマンベツにいたる自動車道路建設の阻止（これは知事および、関係町村の理解と協力によって中止された）、それに問題となった恵庭岳の丸駒（オコタンベ

川口間の車道建設問題の対処などがある。

そのほか真駒内の柏ヶ丘の緑地問題など多くの事項についてもすでに会報、会誌などで報告済みであるので、ふたたびここにそれらを一々とりあげる要もないが、多くの意見具申がそれぞれに適切に処理されて、よい結果を得ている反面、一向に改善されず、かえっておそれられていたことが、しだいに具体的に表面に出てきている場合もある。

たとえば阿寒国立公園内の屈斜路湖畔、仁伏の私有地が売りに出されていることが先日新聞で報ぜられていたが、こういう問題はすでに私たちのおそれていたことで、これが別荘地の建設というような問題に進

んでゆくと、国立公園として好ましくない種々の問題が発生してくる。また、建物がふえれば当然下水処理の問題、なによりもおそれられるのは湖水の汚濁の危険である。このことは、洞爺湖などにおいて重要な問題としてとりあげられていながら、一向に具体的な解決がなされていない。

また国立公園内の、ことに遊覧船上の必要以上に高らかな案内などの騒音も、十年一日の感がある。都市においては、公害問題の進展にともなって騒音防止条例などが施行されて、しだいに改善されつつあるが、静寂であるべき自然の風景の中で、騒音のとりしまりが行なわれないというのは残念なことである。

協会の仕事と今後の課題

夫 責 手 井

しかし、船の高声なラウド・スピーカーの問題はまたしも、汚水処理というような問題になると、なかなか各個人の力では解決し得ないことが多い。たつた一、二軒の家の汚水なら吸いこみ方式などでも一応解決されるが、小さな集落や村となれば当然下水の処理問題がおこり、それはこれまでは川や湖や海へ流しこめばそれですんでいたのである。それをなんらかの浄化装置を義務づけるといふことは、これは個人の問題ではなくて、その土地の管理機関のすべき仕事になってくる。

早い話が、最近暖房が石炭にかわって、石油が各家庭で多く用いられてきている。それによって、やはり亜硫酸ガスの発生の問題がおこってくる。それは社会的に、あるいは化学的に研究されて解決されなくては、どうにも個人として方法はない。

これと似たことが、いつも国立公園でおこるのである。そしてそういう個人的な解決の困難な事柄の集積が、やがて公園の中でクローズアップされてくる。こうした問題の解決のためには、強力な管理組織が必要である。また、レインジャーの増強、私有地の国家による買上げ、関係法規の整備、何よりも予算の裏づけなど、つねに要望されながらなかなか実現されない。それ

はなんらかの形で大きな犠牲がおこるまで放置されるのが、実際である。

ところで自然保護の問題は、ただに各種公園内の問題にとどまらない。公害問題は広い意味での自然保護に直接つながる問題である。そして、公園区域外でおこってくるこういう自然破壊の問題は、しだいにその影響を直接、間接に公園自体におよぼしてくるのである。

去る二月二十五日の北海道新聞に、神山恵三氏が「汚される空」と題して執筆されているところによると、すでにグリーンランドの水でさえも、鉛の含有量がふえている。大気中の炭酸ガスは明治初年、一八七〇年代にくらべて現在では一七%もふえている。亜硫酸ガスにいたっては、一〇年で六倍になっているという。こうした影響はやはり直接に公園内の自然が、もはや公園管理の問題だけではすまないことを示している。自然保護は本質的に、公園外の社会的、経済的、政治的動向の影響を直接に受けて、しかも人間の健全な発展の、バロメーターとなっているのである。

具体的にいえば、たとえば北海道が工業の建設地として脚光を浴びてきている。苦小牧よりさらに大規模な、工業団地の建設計画も進められているという。そうした工

業化が進んでゆけば、それが公園区域外だからといって安心してはいられないのである。すでにそうした人々にとって、公園利用の必要性も従来とはちがった形をとることが予想されるし、自然の重要性とそこに行く頻度も高まってくるのである。

こうしたことを考えると、もはや自然保護協会は、協会だけの主張をしていては問題解決にはならない。産業、工業、交通、運輸、居住、観光、レクリエーションなどの広い分野の総合的な観点から将来の北海道の、さらには日本全国における立場から全体の輪の一環として、生活の中の自然として改めて検討されねばならない重大な時期に来ている。そのための準備を協会としても早々に、着手しなくてはならない。

そのさい重要なことは、各方面の要望の調整はもちろん大事なことであるが、その前にもっと基本的な研究が必要であろう。そしてその基本的な研究分野の方向づけと問題点を探り出してくるために、今後、頻繁な話しあいが行なわれねばならない。そして一方、私たちの文化の中でも自然保護の重要性和意義とを、教育によってひろげ深めていかねばならないことである。

(北大文学部教授)